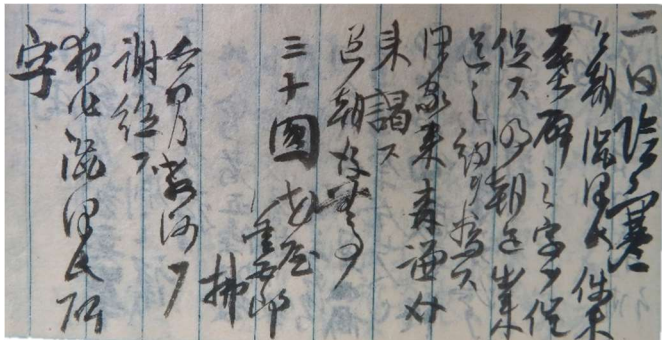


渋沢栄一と巖谷一六・小波父子 — 栄一父の招魂碑と渡米実業団 —

場所：甲賀市水口歴史民俗資料館併設巖谷一六・小波記念室

巖谷一六と栄一父の招魂碑

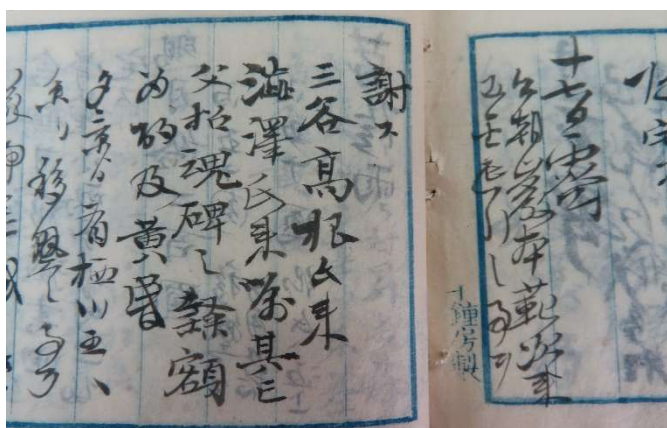
①巖谷一六日記 第二冊「一六居士日録 起壬申 自明治五年三月至同十一月」(当館蔵)



二日 陰寒
今朝、渋沢氏使来、
墓碑之字ヲ催
促ス。明朝迄、出来
迄之約ヲ為ス。
同家来森謙介
来謁ス。
退朝後無事。
三十円、花屋金五郎払。
今日より教師ヲ
謝絶ス。
夜、作渋沢氏碑
字

近代日本の大実業家渋沢栄一は巖谷一六との交友があり、一六日記には栄一が一六に書を依頼した記録が残されています。栄一の父市郎右衛門が逝去した翌年の明治5年(1872)11月2日、「渋沢氏」の使いが、「墓碑の字を催促」しに来たので、一六は「明朝までに」完成させると約束をします。同日には、使だけでなく、栄一の家来も訪れました。その夜、一六は「渋沢氏碑字」を作ったと日記に記しました。催促されたので、夜なべ仕事で書いた様が思い浮かびます。

②巖谷一六日記 第三冊「適意随録 自明治六年一月至同七月」(当館蔵)

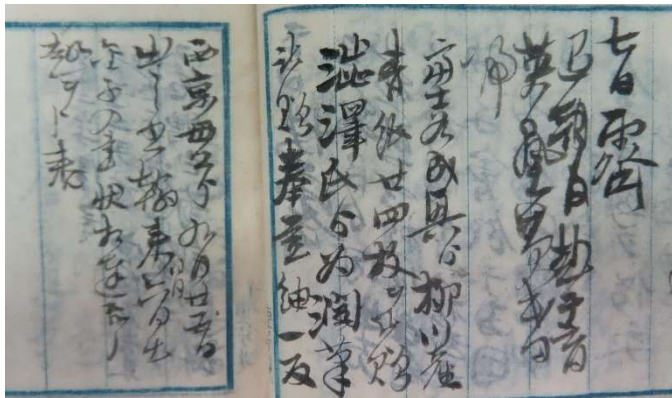


十七日 霽(晴)
今朝、巖本範次来。
返金延引之事ヲ
謝ス。
三谷、高根氏来。
渋沢氏来、嘱其亡
父招魂碑之隷額。
留酌及黄昏
(後略)

翌年の明治6年6月17日に、「渋沢氏」が訪れ、「亡父」の「招魂碑」の「隷額」を頼んだとあります。「留酌」と続くので、夕方まで酒を酌み交わしていたようです。

招魂碑は東京谷中霊園の渋沢家墓所内にありましたが、平成26年(2014)に旧渋沢邸「中の家」の敷地内に移設されました。「晩香渋沢翁招魂碑」は一六の筆による額、撰文(文章)は栄一の従兄の尾高惇忠、書は日下部鳴鶴であり、また栄一の母の碑は、撰文が栄一、書は一六によるものです。

③巖谷一六日記 第四冊「一六居士日録 自明治六年八月至同七年四月」(当館蔵)



一六が栄一に招魂碑の隷額を頼まれた 4 ヶ月後の明治 6 年(1874)10 月に、潤筆料、つまり依頼された書の報酬として、「奉書紬(ほうしょつむぎ)一反」を受け取っています。

なお、「奉書紬」は紬の精製品で、福井県大野地方、石川県小松地方の特産品です。優良な絹糸で緻密に織り、精練した羽二重(はぶたえ)に近く、奉書紙のように純白であることから名づけられた絹織物の一種です。

七日 霽(晴)
退朝後、赴于育
英塾、黄昏
婦。
富士谷成興より、柳川産
青紙廿四枚ヲ被贈。
渋沢氏より為潤筆、
被贈奉書紬一反。
(後略)

巖谷小波と渡米実業団

④巖谷小波『新洋行土産』明治 43 年(1910)博文館発行(当館蔵)



渡米実業団は、明治 42 年(1909)、渋沢栄一が団長となり、東京・大阪・京都・横浜・神戸・名古屋の商業会議所を中心とした民間人 50 名を率いて、3 ヶ月にわたりアメリカ合衆国の主要都市を訪問しました。各地で政治・経済・社会福祉・教育など多方面の施設を見学し、第 27 代アメリカ合衆国大統領ウィリアム・タフト、発明王トーマス・エジソンなど各界の実力者と面談し、アメリカ社会を体感しました。

『新洋行土産』は小波自身が「見もし聞もし感じもした事を、ありのままにならべ立て」、上巻は日記を、下巻には見聞を中心に渡米中の電信が掲載されています。

冒頭で、渡米実業団はエジソンと面談したと述べましたが、小波はニューヨークに着いた後も汽車に残り、日本への電信を書いていたところ、列車が動き出し、午後エジソン訪問に参加することができなくなりました。「返す返すも残念でならない」とその悔しい思いを綴っています。

国立国会図書館デジタルコレクションでは『新洋行土産』上下巻全文を閲覧することができます。



迎 歡 の 市 ル ト ナ シ